



馬耳東風

アルゼンチンタンゴの名曲「ラ・クンパルシータ」の作曲者はウルグアイ人、第一回ワールドカップ優勝国はウルグアイ、この二つをウルグアイの人たちはとても誇りにしている。しかし最近、もっとも誇り得るべきことがあることを知った。この春引退したホセ・ムヒカ元大統領その人である。彼は世界一貧しい大統領といわれ、彼を一躍有名にした演説が日本でも絵本になり出版されている（『世界で一番貧しい大統領のスピーチ』汐文社）。この絵本は、2012年、リオデジャネイロで開催された「国連持続可能な開発会議」における彼の演説の意識に絵を付したものである。会議での演説内容が絵本になるなどこれまで私は聞いたことがない。それほどインパクトがあったということであろう。

この会議は、その名称が示すように、地球温暖化等の環境悪化が進む中で、どのようにすればこれからも開発が続けられるか？について議論する会議であり、世界各国の政府関係者ら約44,000人が出席した。その「本会議」において、彼は、『われわれは発展するためにこの世に生まれてきたのではない。幸せになろうと思って生まれてきたのである。』『経済至上主義のわれわれの生き方が地球を危機に陥らせたのであり、目の前にある危機は、地球環境の危機ではなく、われわれの生き方の危機である。』とあってわれわれの価値観の転換を主張した。そして『貧乏とは少ししか持っていないことではなく、もっと、もっと、と欲しがることである。』とも。老子に「足る」を「知る」〈知足〉とか、英語の諺にもContent is a kingdom. 等があるように、同趣旨の考えは昔からあった。しかし、ホセ・ムヒカ大統領から発したこの言葉は、千金の重みがある。なぜなら彼は、『大

統領官邸に住んで42人の職員を雇うぐらいなら、学校のために経費を使いたいの、住まない。』と言って、中古のカブトムシを自ら運転して自宅から通勤し、給料はウルグアイ人の平均給与に相当する1/10だけ受け取って、残りは寄付という生活をしている人間だからである。

小国ウルグアイ大統領の演説は本会議の最後になされたそうだが、各国の首脳（わが国は当時の玄葉外務大臣）の演説の中で、異彩を放ち、大きな感銘を与えた。

新聞報道によるとローマ法王（フランシスコ教皇）が6月18日回勅を出したという。回勅は、カトリック教会の教義の指針となる原則を集めた文書で、地球上の全ての人を対象として発せられるものである。この中で教皇は、現代人があまりに強欲であり、また新しいテクノロジーと進歩へ執着することによって、『われわれの地球はゴミの山になりつつあり、このままだと人類は前代未聞の生態系の破壊を来す』と環境破壊を強く非難し、さらに、『最後の審判の予言はもはや皮肉や軽蔑の対象ではなくなった』とした。

フランシスコ教皇は、ウルグアイの隣国アルゼンチンの出身である。二人がまるで示し合わせたかのように、われわれの生き方、価値観そのものの変革が人類の存続にとって必須であると強いメッセージを発したことは興味深い。ホセ大統領の考えが如何に正論であろうとも、強欲資本主義が席卷している現代の政治の世界では、少数意見に留まらざるを得ない。そこへ、世界に12億人いるカトリック教徒の最高指導者が今回の回勅を出したことは、強力な援護射撃となろう。『地球は今後百年で生物の生存には適さなくなる』というある学者の予測もある現在、二人の『価値観の転換が必要』との言葉は真に重い。 (久)